善無畏仮託の経軌成立過程について

小崎良行

一　はじめに

現存する善無畏訳と伝えられる経軌は二十五部四十五巻あるとされている。[1] その内、『大正蔵』所収の『開元録』（大正第二一五四番）、『貞元録』（大正第二一五七番）に記録されているのは、『虚空蔵求聞持法』（大正第一一四五番）、『大日経』（大正第八四八番）、『蘇悉地経』（大正第八九三番）、『蘇婆呼童子経』（大正第八九五番）であり、その他の経軌は入蔵していない。入蔵している経軌は、中国において善無畏の翻訳であると、言わば公認されたものであるが、善無畏訳と伝えられながらも経録に入蔵していないものの成立に関して、次の点が想定される。①経録から漏れたもの、②善無畏の弟子などが作ったもの、③後世善無畏の名を借りて作られたもの。

『開元録』の成立は開元一八（七三〇）年、『貞元録』の成立は貞元一六（八〇〇）年とされている。善無畏在世と時代をさほど違えずに成立したこれらへの入蔵から漏れることは考えにくいことから、①の可能性は極めて低いと言えよう。②・③のような経緯を辿って成立したと考えられる経典・儀軌に対して、本稿は「善無畏仮託経軌（善無畏の名をかりて作成された経典・儀軌）」とする。

二　本稿の着眼点

胎蔵系の代表的な行法である五字厳身観に本稿では着目する。②・③のような経軌のうち、五字厳身観の記事が見られる経軌は次の七本である。すなわち『摂大儀軌』（大正第八五〇番）、『広大儀軌』（大正第八五一番）、『尊勝儀軌』（大正第九七三番）、『慈氏儀軌』（大正第一一四一番）、『三種悉地軌』（大正第九〇五番）・『破地獄軌』（大正第九〇六番）・『破地獄陀羅尼軌』（大正第九〇七番、以後、第九〇五番―第九〇七番の総称を、三本の「破地獄儀軌」とする）である。

これらの経軌では、五字厳身観の記事が増広されていることが確認できる。本稿はそれらの比較によって、『大日経』

の漢訳以降から唐末の時代における善無畏仮託経軌の成立過程を検証しようとするものである。

三　『大日経』第七巻と『摂大儀軌』・『広大儀軌』

五字厳身観はa・va・ra・ha・khaの五字を自身の体の五処、地水火風空の五輪・五大に布置して加持し、自身を大日如来と等同であると観想するものであるが、その裏付となる教理は『大日経』前六巻の諸品に説かれ、『大日経』第七巻「持誦法則品」において、整備された行法となった。このような五字厳身観の経典→儀軌への展開過程は先行研究において詳細に論じられている[2]ので、概略のみ述べる。

○『摂大儀軌』　まず、満足句の真言「namaḥ samantabuddhānām a vī ra hūṃ khaṃ」を引用し、さらに『大日経』「秘密漫荼羅品」の偈頌を引用している。第七巻からの引用はみられない。（大正一八、八三下）

○『広大儀軌』　第七巻の五字厳身観を説く部分が、『大日経』「悉地出現品」の記述を加味してやや増広された形で引用されている。その直前には嚂字観、直後には虚空蔵転明妃の真言、さらに五字厳身観で建立した五字・五輪の上下を反転させて地輪を最上に、空輪を最下に観ずる五輪器界観も説かれている。（大正一八、九一中―九三上）

四　『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』

『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』に見られる五字厳身観由来の行法[3]は、『広大儀軌』所説の行法をベースとしつつ、それを増広させたものである[4]。この行法全体を概略すると、㈠嚂字観、㈡五輪観、㈢普通真言、㈣三昧耶真言・一切仏心三昧耶印、㈤五輪器界観、㈥金剛三昧耶真言及び印、㈦降三世真言と分けることが出来る[5]。㈠―㈢と㈤は『広大儀軌』所説のものをベースとしたものであり、㈣㈥㈦が『広大儀軌』よりも増広された記事であるが、この増広部分は『金剛頂経』系統の経軌の記事を採用したものである。これは善無畏仮託経軌の特徴の一つである金胎合行化の代表的な例である。なお、㈦の真言は「oṃ niśumbha vajra huṃ phaṭ」であるが、この真言は漢訳経軌にほとんど見られない。よって、増広部分がどの経軌の記事を用いたのか不明である[6]。

五　三本の「破地獄儀軌」

『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』はもともと存在する記事をベースとしてそれを「増広」しているが、三本の「破地獄儀軌」は、もとの記事を単に「増広」する域に留まらず、先行する経軌の記事を基に、そこに新たな独自な解釈を加えているものである。まず、『三種悉地軌』には

観阿字作金剛色。復阿字如方黄壇身在其中。從阿字出羅字燒身悉成灰已。此灰中生縛字其色純白。從此出生阿鑁覽唅欠五輪字。而即從腰下至頂上安立身五處。謂淨菩提心。以此五字門爲縁生大悲根。佛娑羅樹王増長。彌布滿於法界。然一切法。即由此五字門本不生離言説自性淨無因縁如虚空也。爲八葉位從臍至心爲金剛臺海中立莖臍爲大海。從臍已下此地居諸尊位。在海岸邊也。謂從諸佛大悲海而生金剛智。從金剛智出生一切佛會也。於此心八葉花臺上。而觀阿字。從此字出無量光。從心中四散而合爲光鬘。猶如花鬘。普遍一切佛刹。此光從頂至足周匝環繞行者之身也。（大正一八、九一一中）

と、ある。羅字によって身を焼くのは『大日経』や『大日経疏』に見られ、[7] 五字を体の五処へ配当することも見られる。この記事の直後には身体の「咽―頂」「臍―咽」「臍以下」の三支分それぞれに曼荼羅を配することが説かれるが、これは『大日経疏』に依ったものであると言える。[8] さらに、建立した曼荼羅に鉤・索・鎖・鈴の金剛界の四摂菩薩、普賢・文殊・弥勒・観音の胎蔵の四菩薩、そして四方に阿閦（東）、宝生（南）、阿弥陀（西）、釈迦牟尼（北）を配することが記されている。[9]

次に、『破地獄軌』は

地水火風空五輪之種子。阿鑁覽唅欠五字。有地輪。地輪之上有水輪。水輪之上有火輪。火輪之上有風輪。風輪之上有空輪。空輪之。（大正一八、九一二下）

と、かなり簡略な記事となっており、この五輪曼荼羅にさらに、金剛界の三十七尊を配することが記されている。[10]

これらから、まず、三本の「破地獄儀軌」が示す行法が、これまで見てきた五字厳身観の行法を継承するものであることが確認できるが、五字・五輪への観想が説かれるのみであり、『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』所説のもので言えば、㈠㈡のみが見られる。『三種悉地軌』と『破地獄軌』ではさらに、建立した五輪曼荼羅に金剛界の尊格を配することが記され、胎蔵の行法に金剛界の要素が組み込まれている。

さて、三本の「破地獄儀軌」では、五字を五仏のみだけでなく、五部・五臓への配当も見られる。これは三本の「破地獄儀軌」にのみ見られる配当である。

さらに、『三種悉地軌』は五字を木・金・火・水・土の五行、青・白・赤・黒・黄の五色、酸・辛・苦・鹹・甘の五味、春・秋・夏・冬・土用の五季、魂・魄・神・志・意の五神等に配当している。このような中国的陰陽五行思想への五字の配当も、

五字	阿	鑁	藍	唅	欠
五仏	阿閦	阿弥陀	宝生	不空成就	大日
五部	金剛	蓮花	宝	羯磨	虚空
五臓	肝	肺	心	腎	脾
五輪	地輪	水輪	火輪	風輪	空輪
五大	地	水	火	風	空

どの経軌にも記されておらず、『三種悉地軌』独自のものである。

六　まとめ

本稿では、善無畏仮託経軌の成立過程を五字厳身観という視点から検証してきた。『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』は、『広大儀軌』を基盤として、そこに『金剛頂経』系の行法を取り込んでいたことが判明した。

三本の「破地獄儀軌」は、五字を身体の五処・五輪・五大へ配当する域に留まらず、五臓・五仏等新たな要素へ配当がなされていた。さらに言うならば、『広大儀軌』・『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』のようにベースとなる行法を踏襲して構成されたものではなく、胎蔵由来の五字五輪観を中心としながら、金剛界の尊格を取り入れた独自の曼荼羅を建立している。しかもそこに陰陽五行への五字の配当がなされる等、独自の五輪曼荼羅の行法が説かれている。そういった金胎合行的要素と、中国思想の付加の過程に、善無畏仮託の経軌が成立し、展開していく過程を見ることが出来る。

1　『望月仏教大辞典』第三巻、世界聖典刊行協会、一九三三、三〇〇五頁。
2　川崎（二〇一四）参照。
3　『尊勝儀軌』大正一九、三六八中―三六九下。
『慈氏儀軌』大正二〇、五九〇上―五九一下。
4　小崎（二〇一六）。
5　なお、小崎（二〇一八）でも指摘しているように、『尊勝儀軌』と『慈氏儀軌』では修法の順番が若干異なり、また『慈氏儀軌』にのみ説かれる行法もあるが、概ね同様の行法であるため、『尊勝儀軌』の記事を用いた。
6　漢訳圏においてこの真言が見られる経軌は、『尊勝儀軌』よりも後年の訳出であると考えられる。小崎（二〇一六）。
7　『大日経』大正一八、四七中―下。
『大日経疏』大正三九、六六六中。
8　大正三九、六一一上―中。
9　大正一八、九一一中―下。
10　大正一八、九一二下―九一三下。

〈参考文献〉
小崎良行「『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』「尊勝真言持誦法則品」について」『智山学報』第七九号、二〇一六
小崎良行「善無畏仮託の経軌成立に関する一、二の問題――『慈氏菩薩略修愈誐念誦法』を中心として――」『密教学研究』第五〇号、二〇一八
川崎一洸（洋）「経、儀軌、次第」『現代密教』第二五号、二〇一四

〈キーワード〉　五字厳身観、善無畏、金胎合行

（大正大学大学院）